

〈黄帝と老子〉雑観 第15回

五蔵六府はなぜ五蔵六府なのか

『黄帝内経』の謎を解く鍵は数術にある (その3)

『黄帝内経』研究家 松田博公

ツイート 0

いいね! 7

- 第10回 [天道は循環し、経脈も循環する](#)
[『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ \(その4\)](#)
- 第11回 [王の治身が治国の本である](#)
[『黄帝内経』と黄老の「治身治国」思想 \(前編\)](#)
- 第12回 [『黄帝内経』の身体国家論の完成と風化](#)
[～『素問』靈蘭秘典論から『靈枢』師伝篇、外揣篇へ](#)
[『黄帝内経』と黄老の「治身治国」思想 \(後編\)](#)
- 第13回 [天の聖数が繋ぐ万物感応のネットワーク](#)
[『黄帝内経』の謎を解く鍵は数術にある \(その1\)](#)
- 第14回 [天数を修める者は三、五に通ずべし](#)
[『黄帝内経』の謎を解く鍵は数術にある \(その2\)](#)

わたしが、五蔵六府の命名は臓腑の実数に基づくのではなく、「天六地五」の古代観念の当てはめであると知ったのは、7年近く前、趙洪鈞先生の著書『《内経》時代』に触れたときであった。趙先生は、中国の中西医結合派の医師だが、『黄帝内経』の研究に身を入れ、古代思想を踏まえた『素問』『靈枢』の読解で一家言をなしておられる。『《内経》時代』は、現在、70歳の趙先生の40歳ごろの自費出版書で、わたしはインターネットの交流サイトに転載された文章を読み、「『黄帝内経』の体系は天人相応の体系である」という断言に我が意を得たりと感動した。そして、五蔵六府という定型句は、「天六地五」という「天数」から導かれているという説に納得した。同時に、日本の古典派鍼灸師や中国の伝統派中醫師から現代医学の回し者であるかのように見られている中西医結合派に、数術を含む古代思想を視野に入れた重厚で本格的な『内経』研究家が存在していることに驚き、視野の狭さを羞じたのである。[『《内経》時代』は、2012年、北京の学苑出版社から刊行されている。]

この本で趙先生が論証しているように、五蔵六府が神秘数「天六地五」



今週号のPRの部屋はこちら

●訪問マッサージ&訪問鍼灸のお悩み相談会

★メディカル求人天国

「メディカル求人天国」のツイッター開設記念キャンペーン実施中!(求人広告が1000円(税別)でできる!)>>>
[こちら](#)

★メディカル求人天国の

ツイッター→→→→ [こちら](#)

■ヒューマンワールドのセミナー

●「超楽トランスファーテクニック」セミナー

(2015/3/21)

●あはき師のための在宅ケア実践セミナー (2015/3/22)

●クリニカルストレッチセミナー (2015/4/19)

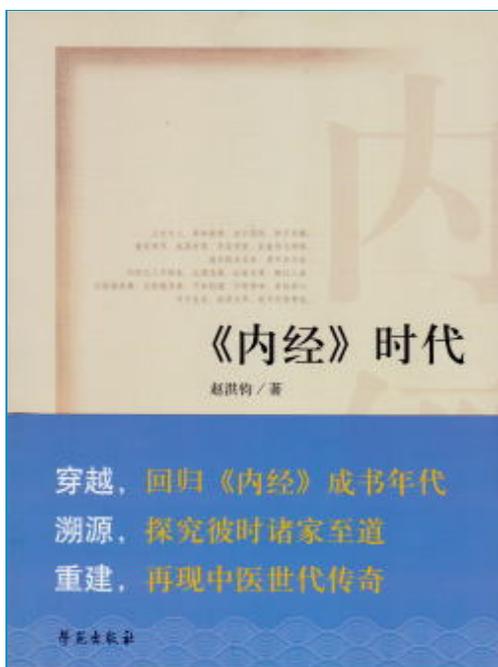
●あはき師のための変形徒手矯正術セミナー

に基づく命名である証拠は、古代文献に語らせることができる。まず、「天六地五」の概念の初出を、周の時代の歴史を記した『国語』周語下に見てみよう。

「天六地五は数の常なり。之を経するに天を以てし、之を緯するに地を以てし、経緯爽（たがわ）ざるは、文の象なり」（天六地五は永遠不変の数のきまりである。天の六気を縦糸とし、地の五行を横糸とし、森羅万象を組織し、経緯が狂わないのは、文徳の象徴である。）

だが、なぜ「天六地五」が政治においてかくも重大な根源数なのかを、『国語』は教えてくれない。知らなかったのではなく、ただ書いていなかった。古代の文書とはそういうものである。謎は、遙か時代を隔てた後漢の『漢書』律曆志上が解いている。

「伝に曰く、天六地五、数の常なりと。天に六気あり、降りて五味となる。それ五六とは天地の中合いにして、民の生を以て受ける所なり。故に日に六甲あり、辰に五子ありといひ、十一にして天地の道は畢（おわ）んぬ。終りて又始まるという」（古伝-『国語』周語下-にいう。「天六地五」は数の永遠不変のきまりであると。天に六気（陰・陽・風・雨・晦・冥）があり、降って五味（酸苦・甘・辛・鹹）を生じる。そもそも五六は天地の中合であって、民が受けて生ずるところである。それゆえ、日に六甲があり、辰に五子があり、この十一で天地の道は畢り、終ってふたたび始まることをいう）



ここに説明されているのは、暦のことである。中国では、すでに紀元前数千年をさかのぼる殷代から天文観察に基づいて暦が作られていた。毎日に天干地支を当てはめ、日々を記録していたことは、現在まで連続と引き継がれている。天干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）は十あり、地支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）は十二ある。合わせて十干十二支という。十干十二支を日々当てはめていくと、10と12の最小公倍数は60なので、（それを「一甲子」という）、60日で一周する。一甲子

（60日間）に甲は甲子、甲寅（こういん）、甲辰、甲午、甲申、甲戌（こうじゅつ）の6回現れ、子は甲子、丙子、戊子（ぼし）、庚子（こうし）、壬子（じんし）の5回現れる。この六と五こそが宇宙を構造化している天数であり、万物を貫く根源的、原理的な数であるというのである。

(2015/6/7)

●[ダイエット・アロママッサージュセミナー](#) (2015/7/5)

★[ヒューマンワールドの本なら→→→→→](#) [こちら](#)

★[ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→](#) [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

★詳細は≫≫ [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は≫≫ [こちら](#)

ついでながら、「五六とは天地の中合い」とは、至高の陽数とされる九の数列の真ん中は五であり、五＋六＝十一の数列の真ん中は六である。また、十、十二の半分は五、六となるという意味である。

このように、五六の数の原理は、天地の運行を記録した暦とともに誕生した。ここではそのことを記憶しておこう。このあとで振り返るからである。

さて、このように殷代から周代にかけて人々は五六原理を発見したが、この時代、五六原理は、まだ宇宙論や政治学の領域に止まり、人体構造モデルとしては機能していなかった。医学が未発達だったからである。

その素朴な医学も戦国時代から漢代へと発展する。疾風怒濤の世相を背景に儒・墨・陰陽・老莊・名・法・兵など諸子百家が議論にしのを削り、それらを束ねる黄老思想が頭角を現し、医学もそれと深く結びつく。その中で中国古代の普遍学であり、領域を越えて浸透したのが天人合一観と数術であった。原『内経』ともいべき古代医学の臓腑経脈説や人体構造論の構築に、天地宇宙と身体は一つだとする天人合一観とそれを論証する数術は決定的な役割を果たし、五六原理も、人体や生命の秘密を解く「天数」の一つとなったのである。

◇人の形体は天数に化して成る

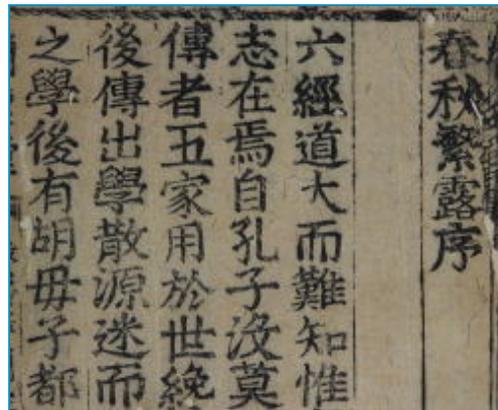
政治から道德、学術、医学までをも席捲した前漢・武帝時代の数術的世界観を、時の儒者、董仲舒は、『春秋繁露』で鮮明に記録している。天地陰陽の気の非平衡が病を引き起こすことも述べているが、政治学と医学が同一平面で論じられていることに注意しておきたい。長くて煩わしいかもしれないが、この連載で見てきた『靈樞』邪客篇、経別篇などに典型的に示されるいわゆる『黄帝内経』の天人観が、『春秋繁露』のそれと酷似していることを再度確認する意味で、引用しておこう。

「氣より精なるは莫く、地より富めるは莫く、天より神なるは莫し。天地の精の物を生ずる所以の者は、人より貴きは莫し。人は命を天に受くるなり。故に超然として以て物より高きことあり。物は痰疾（ちんしつ）あって能く仁義を為す莫し。唯だ人のみ独り能く仁義を為す。物は痰疾ありて能く天地に偶する莫く、ただ人のみ独り能く天地に偶す。人に三百六十節あるは、天の數に偶す。形体骨肉は、地の厚きに偶す。上に耳目の聰明あるは、日月の象なり。体に空竅理脈有るは、川谷の象（かたどり）なり。心に哀樂喜怒あるは、神氣の類なり。（略）

是の故に人の身、首（＝頭）、盆（ほん＝大きい？）にして円たるは、天容に象る。髪は、星辰に象る。耳目戻々（れいれい＝敏感）たるは、日月に象る。鼻口呼吸するは、風氣に象る。胸中達知あるは、神明に象る。腹胞の実虚は、百物に象る。百物は最も地に近し。故に腰以下は地なり。天地の象、腰を以て帯と爲す。腰以上は精神尊嚴にして、天類の状なり。

腰以下は豊厚卑辱にして、土壤の比なり。足、布（ひろがり）て方なるは、地形の象なり。是の故に礼に、帯に紳（＝大帯）をつくるには、必ずその腰に直にし、以て心を別つ。帯よりして上は盡く陽たり。帯よりして下は盡く陰たり。各々分有り、陽は天の気なり、陰は地の気なり。故に陰陽の動くや、人をして足の病み、喉痺（＝咽喉が腫脹閉塞すること）を起こさしむれば、則ち地の気上りて雲雨と爲り、象も亦之に応ずるなり。天地の符、陰陽の副（＝そえ役）、常に身に設けらるれば、身はなほ天のごとし。数と之と相参わる、故に命と之と相連なるなり。天は終歳の数を以て、人の身を成す。故に小節三百六十六は、日の数に副う（＝従う）。大節十二分は、月の数に副う。内に五藏あるは、五行の数に副う。外に四肢あるは、四時の数に副う。乍（たちま）ち視乍ち瞑きは、昼夜に副う。乍ち剛乍ち柔なるは、冬夏に副う。乍ち哀乍ち楽なるは、陰陽に副う。心に計慮あるは、度数に副うなり。行いに倫理あるは、天地に副ふなり」

（気は最も精微なる存在であり、地は最も豊かな生命の根拠であり、天は最も神秘的な力である。人は天より命を受けるものである。そこで人は超然として動物より高い地位を有するのである。動物は欠点があって、仁義をなすことができるものはない。ただ人だけが仁義をなすことができる。また動物は欠点があっ



て、天地をかたどることができず、ただ人だけが天地をかたどっている。人に三百六十の関節があるのは、天の一年の数をかたどっている。形体や骨肉の頑丈なのは、地の厚みをかたどっている。身体の上部にもものを賢く聴き見る耳目があるのは、天にある日月をかたどっている。身体に種々の穴や凹み、筋目、血脈があるのは、地にある川や谷間をかたどっている。心にある喜怒哀楽は、天地にある靈妙な気と同類である。

（略）人の身体で、頭部が大きく丸いのは、天の丸い形をかたどっている。髪は星辰をかたどっている。耳目の敏感な反応は日月をかたどっている。鼻口の呼吸は天地の風をかたどっている。胸中の知覚は天の神気の靈妙さをかたどっている。腹腸が満ちたり空になったりするのは地上の諸物の消長をかたどるものである。このように人の腹腸が対応する諸物は地に最も接近しているから、腹腸が位置する腰から下は地に相当する。天地の人の身体におけるかたどりは、腰をもって身体の天地を分ける帯とする。腰から上にあるものは、靈妙で尊厳を保ち、天に属するものの姿を示す。腰から下にあるものが、ふっくらと厚みをおびつつ卑賤であるのは、厚みを持ちつつ低い位置にある地の土壤に対比される。足が四角く広がっているのは、同じく四角く広がる地形をかたどっている。だから、礼において、大帯を身に着けると、必ず腰にまっすぐ当て、腰から下の卑賤なものを心と分かたつのである。帯から上はすべて陽であり、帯から下はすべて陰である。それぞれ分を有しており、陽は天の気であり、陰は地の気である。そこで陰陽の気が動くと、人に足の病や喉の腫脹閉塞を起こさせるが、そのときにはすなわち地の気は上昇して雲や雨となり、人の病気の部

位の動きもまた天地陰陽の動きに依っているのである。天地の符合、陰陽の投影は、常に身に備わるので、人の身は天と同じなのである。数と身はあい交わり、だから命と身はあい連なるのである。天は満一年の数を用いて人の身体を完成させる。この結果、人の小関節三百六十六は一年の日数に従うのであり、大関節十二は一年の月数に従うのである。体内に五蔵があるのは、五行の数に従うのであり、体外に四肢があるのは、四季の数に従うのである。目覚めて物を見たり、眠ったりするのは昼夜に従い、剛強さがあつたり、柔和さがあつたりするのは、冬と夏に従い、悲しんだり楽しんだりするのは、天地陰陽の気の変化に従い、心に計画や思慮があるのは、自然界の基準と法則性に従い、行動に倫理が備わるのは、天地の理法に従うからである。) (人副天数篇)

「生を為(な)すも人を為す能はず。人を為す者は天なり。人の人為(た)るは天に本づく。天は亦人の曾祖父なり。人の形体は天数に化して成り、人の血気は天志に化して仁に、人の徳行は天理に化して義なり。人の好悪は、天の暖清に化し、人の喜怒は、天の寒暑に化し、人の受命は、天の四時に化す。人生まれて喜怒哀楽の答有るは、春夏秋冬夏の類なり。喜は春の答なり。怒は秋の答なり。楽は夏の答なり。哀は冬の答なり。天の副、人に在り。人の情性、天に由(よ)る者あり。故に曰く、「受」と。天に由るの号(い)いなり」

(人は父母として人の生命を生み出すことはできるが、人を人にできるわけではない。人を人にするものは天である。人が人であるのは天に基づいている。天はまた人の遠祖であり、人は上に向かって天と同類である。人の形体は、四肢が天の四時に対応し、一肢が三つの関節からなるのは、一つの季節が三ヶ月からなるのに対応するというように天の数に感応して生まれ完成し、人の血気は天の意志に感応して生まれ仁を志向し、人の徳行は天理に感応して生まれ義あるものとなり、人の好悪の感情は天の気候の暖涼に感応して生まれ、人が天命を受けるのは天の四時に感応して生まれ、人が生まれながらに喜怒哀楽の反応を持つのは、天の春夏秋冬と同類である。喜は春と感応し、怒は秋と感応し、楽は夏と感応し、哀は冬と感応する。これらは天の投影が人に備わったものである。このように人の情性には天に基づくものがある) (為人者天篇)

◇五蔵六府は五行六合に法るなり

このような時代思潮の中で、「天六地五」の天数が伝承からよみがえり、五六原理に従って臓腑の数が決められたのである。後漢の書物『白虎通』には、それが明言されている。

「人に五蔵六府あるは、何に法(のつとる)か。五行六合に法るなり」(五行篇)

「人もと六律五行の気を含みて生まれる。ゆえに、内に五蔵六府あり。五蔵とは何か。肝、心、肺、腎、脾を謂うなり。六府は何を謂うや。大腸、小腸、胃、膀胱、三焦、胆を謂うなり」(情性篇)

「天六地五」（「五行六合」「六律五行」はその読み替えである）に従えば、天は陽であり数は六、地は陰であり数は五である。蔵府は陰陽に分けられるから、必然的に陰の蔵は五であり、陽の府は六になる。そうでなければ、天地の中和を得ることができず、民は以て生を受けることがない。そうでなければ天数に違反し、天と繋がらず、健康は維持できないのである。

かくして、『靈枢』経脈篇で定式が完成して以来、中国医学は「六蔵六府」論で運用されてきたのに、なぜ「五蔵六府」の決まり言葉が強固に残ってきたのかが、了解できるだろう。同時に、五と六を足した数十一が聖化されたこと、馬王堆漢墓出土の『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経』を生み出した思考の枠組みは何であったかも推測できるのである。

この「天六地五」の数は、卓廉士が着目した「三五の道」の要素だが、「三五の道」の数の来歴は一つではなさそうである。例えば「五」なら「五」の神秘数の意味は、唯一の正解には還元できない。さまざまな解釈が結びつき重なり合って、総合的な天地宇宙と繋がる数術世界を形づくる。数術とは宇宙が繋がり合う生命の連鎖であることを確認する技術であり、ある数術はそれ自体、幾重にも他の数術と絡み合う網の目の一つなのである。「五」の原理数についていえば、前回紹介した『換個方法読《内経》靈枢導読』の著者、劉明武は、「天六地五」説とは別の意見を持っている。

五六原理が殷代以降に成立した暦から算出されたことは先に見た。暦は天と人を繋ぐ媒介であったから、神秘数の最も重視された発生源となったのである。劉明武の考えも、暦に立脚している。中国南部の少数民族・彝（い）族が伝える十月太陽暦を根拠に殷代の太陰太陽暦以前に1年十ヶ月の太陽暦が存在していたとする見方を支持し、神秘数「五」の聖化は、この太陽暦が季節を五季に分けていたからだとする。

◇「五」の聖化は彝族十月太陽暦から？

十月太陽暦では、1ヶ月を36日とし、1年は360日である。2ヶ月を一季とし、1年は五季である。この五季に土、銅（=金）、水、木、火の五行を配当し、一季は72日になる。各季は東、西、南、北、中央の方位に対応している。1年十ヶ月には甲乙丙丁の十干を当てはめ、毎月36日には鼠、牛、寅、兔、龍、蛇、馬、羊、猿、鶏、犬、猪と動物名の十二支を当てはめている。十干は1年に36周し、十二支は毎月3周する。

地球が太陽を一周する時間は365.25日なので、日に換算すると十月太陽暦の360日では、5日ないし6日足りない。そこで、冬至を大年、夏至を小年と名づけて1年を二つに分け、平年は大年の後に3日、小年の後に2日の過年日を設け365日とする。閏年は、大年、小年とも過年月を3日にし、366日とする。過年月は暦に入れない。

十月太陽暦の陰陽二元原理は明瞭である。冬至、夏至で1年を二分割して大年と小年に分け、一季2ヵ月を公（＝男）と母（＝女）に分けている。五季五行と結び付いた五の聖化も、劉明武の言うように確かだろう。五行は殷代の五方位観から生まれたとされてきたが、それだけではないかもしれない。この暦では、ほかに三、十二、三十六、七十二、三百六十などの数が柱となっている。

前回、レヴィ・ブリュルの『未開社会の思惟』（岩波文庫）に拠って見たように、数を媒介とする「融即」の世界観は、新石器時代にさかのぼる。十月太陽暦から浮上するこれらの神秘数は、殷代の太陰太陽暦から誕生した五六原理やその他の数術と融合しながら歴史を超えて伝えられてきたのだろう。

ところで、『素問』の刺要論篇や陰陽類論篇には、人体の五蔵がそれぞれ七十二日をつかさどるとする記述があり、解釈の難しい個所とされている。

「脾、動ずれば則ち七十二日」（刺要論篇）

「春は甲乙、青、中は肝をつかさどる。治めること七十二日、これ脈の時をつかさどるなり」（春は1年の最初で甲乙木に属し、色は青。五蔵では肝をつかさどり、肝は春の七十二日間盛んでこの期間は肝脈がつかさどる）（陰陽類論篇）

劉明武は、これら七十二日は、彝族十月太陽暦の一季七十二日の天数に合致する天人合一観の表現だと考えている。十月太陽暦は、歴史から失われたが、その痕跡が『黄帝内経』に残存しているというのである。

こうした暦を成立させている神秘数を社会統合の基準として使用し、宇宙の万物は連なり感応し合っていることを確証する合理的な呪術とでもいうべき方法が数術であった。漢代には、この天文の数理による世界構成法が、音楽の数理と接合され、易とも連携させられて政治から諸学問に至るマニャックなまでの体系化が行われる。現存『素問』『靈枢』の原資料と目される『黄帝内経』十八卷、『外経』三十七卷ほか、扁鵲内外経、白氏内外経などが宮廷の図書目録に記載されたのは、このような時代であった。

それにしても、なぜ音楽なのだろうか。

ツイート {0}

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

[HOME](#)

HUMAN WORLD
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [求人天国](#)
[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.